

郡司和斗歌集

『遠い感』

(短歌研究社)

子ども部屋のようになった日本社会。食べ物も娯楽も不足なく便利に個室に用意され、傷や害となりそうなものはやさしく遠ざけられている。国家、を文字通り一つの家とみるなら、老いや死はとなりの部屋に隠されているのをうつすらと感じるが、出口はない。という舞台。

ぐんちゃんと呼んでください 手を後ろに組んでささくれちらちら剥いた

地下鉄のドアに貼られた広告の小さな広瀬すずを撫でまくる

〈陽キャ〉は陽気なキャラクター、にはなれずへくそでかい感情から遠く、だがそのようなネットミームやゲームの世界には馴染んでいる。体や心が大きく傷つけられることがない代わりに、ささくれほどの小さな痛みには敏感になる。無遠慮に触れるときは対象が二次元となったとき。慎重さと繊細さ。主人公をとりまいてる風景、小道具などの装置は具体性を持ち、現実の手触りをコミカルに伝えてくる。一首一首の場面性が非常にクリアだ。

一人だけの民族みたいはなびらをひたいにつけて踊る
あなたは

一人一人が違った文化を持ち尊重される、そのように存在できれば平和に美しく愉快に生きられるのでは。という希望をこの二〇代の作者に感じた。
(白川ユウコ)

後藤由紀恵歌集

『遠く呼ぶ声』

(典々堂)

美しい韻律で、しんとした淋しさを詠う。季節で言えば、少し寒くなりかけた初秋のイメージだ。二〇一三年から二〇二二年までの作品、四八一首を収めた第三歌集。

路地に咲くほたるぶくろの鈴なりのひとつひとつに入れるかなしみ

性別を持つ淋しさよ実の落ちぬ銀杏並木を見上げておりぬ

陽の当たる場所から咲いて散ってゆくその正しさにさくらよさくら

まず、流麗な韻律に魅了される。韻律がないがしろにされがちな現代短歌において、重要なことだと思う。かなしみを鈴なりのほたるぶくろに入れてゆくと詩的に昇華し、また雄雌のある銀杏の実の落ちぬほうを見上げて性別を持つ淋しさを問い、またさくらの咲いて散る順番の正しさに抗えぬ自然の摂理を見る。いずれも植物を詠みながら、心情を重ねており秀逸である。

まだ少しこころ残して東京に降るはつゆきのニュース
見ており

スカートの裾をゆらして百合のごと人を待ちたる季節
のありき

歌集全体を通して、人を恋うほのかな灯が垣間見え、切ない。
(大西淳子)